

非行少年少女の就労を支援する ガソリンスタンド

有限会社 野口石油

福岡県北九州市戸畑区初音町6-30
従業員数：33人

犯罪や非行で家庭裁判所に送られて保護観察処分となった少年と、少年院を仮退所した少年は、月に数回保護司と面談して指導を受ける。面談は、保護司からの報告に基づき保護観察所長が解除を決定するまで続く。しかし、この保護観察期間中に再び罪を犯す者が少なくない。再犯者の多くは仕事を持っていない者で、成人と少年を含めた再犯者の中で無職者は72.2%。有職者27.8%のほぼ3倍である。仕事とお金があれば生活が安定するが、なければ再び罪を犯す可能性が高くなるからである。このことから、仕事の確保が再犯防止の鍵とされ、これらの事情を理解したうえで彼らを雇用する事業主が求められている。その先駆者の1人が、北九州市内でガソリンスタンド3店舗を展開する野口石油社長の野口義弘さんである。現在33人の従業員のうち17人に非行歴があり、これまでに雇用した非行少年少女は25年間で150人以上に上る（一部成人を含む）。福岡県協力雇用主会の会長でもある野口さんに、取り組みの背景と実態を聞いた。

■ 少年期の体験

野口さんは1943年、鹿児島県の生まれ。



野口義弘社長

熊本県植木町で少年時代を過ごした。12歳のとき父を肺結核で亡くし、15歳のとき母が高血圧で倒れ、寝たきりになった。食べるものにもこと欠くほどの貧困に陥り、高校進学を断念。地域の人たちが「お金はあるか?」「食べるものはあるのか?」と米や野菜を持ってきてくれ、「頑張れよ!」と励まされたという。その人たちの世話で熊本の大手バス会社に就職。自動車整備の仕事に就いた。後年の協力雇用主としての尽力の背景には、自身の少年時代のみじめ

な体験が、非行に走った子供たちと重なり合い、あの頃、人々から受けた愛情と恩を返したい思いがあるという。

バス会社時代に知り合った宣子^{のりこ}夫人と職場結婚した。その後、一級建築士だった姉の夫から誘われて北九州市に移り住み、建築事務所を手伝ったが、やはり自動車の仕事がしたいとガソリンスタンドをチェーン展開する会社に入り、骨身を惜しまない働きぶりが評価され、やがて社長を補佐する仕事に就いた。

■暴走族少女、春子との出会い

1991年、当時ガソリンスタンドの所長をしていた野口さんのもとに、宣子夫人から電話が入った。「そちらで女の子を1人、雇ってもらえんやろうか？」と言う。宣子夫人は北九州市少年相談センターに勤務。その傍らで保護司もしていた。「非行歴のある子供はちょっと…」と尻込みする野口さんに、宣子夫人は「子供たちはみんな寂しいのよ。チャチャを入れず、目線を合わせて話を聞いてあげて…」とアドバイスしてくれた。

その春子（仮名）という娘は、野口さんがびっくりするような身なりで、とても16歳には見えなかった。化粧は濃く、髪も爪も真っ赤。家出して、深夜徘徊し、シンナー、無免許暴走、窃盗を繰り返していた。自分の父親の車を持ち出してシンナーを吸いながら暴走しているときに逮捕されたと

いう。真っ赤な髪を黒く染め直し、爪のマニキュアを落とすように言って、野口さんは春子を雇うことを決めた。会社にはそのまま報告することがはばかられ、お得意先から頼まれてそこの娘さんを雇うことにした、と報告した。

宣子夫人のアドバイスどおり、ゆっくり時間をかけて春子から話を聞いた。父親は大企業の部長職で家は裕福だったが、晩婚で生まれた娘にはお金を与えるだけで、十分な愛情を注いでいなかった。その結果、娘は非行に走った。野口さんが、心を寄せ、うなずきながら時間をかけて話を聞いたことで、この人は自分の気持ちを理解してくれる、困ったとき助けてくれる…と、春子は思うようになった。次第に心を開き、野口さんを信頼してくれるようになり、半年もすると、明るく元気に接客し、商品販売のナンバーワンになった。彼女はその後結婚。いまは幸せな家庭を築いているという。

野口さんは、それ以前の1983年から、小倉南警察署から委嘱を受けて少年補導員を務めていた。深夜に公園でたむろしてシンナーを吸っている子供たちに「お前ら、なんばしよるとか。はよ帰らんか」と促すのだが、「なんか？ おっさんは警察か？」とすごまれると怖くてならなかった。しかし、春子と出会ったことで、相手の立場に立ち、相手を理解しようとすれば、子供たちは心を開いてくれるのだ、と思えるようになった。

■野口石油の開業

1995年、野口さんは52歳で独立。1998年、規制緩和で廃業が決まっていたJ R戸畑駅近くのガソリンスタンドを引き継いで、有限会社野口石油を立ち上げた。長男の晃司さんと次男の純さんも、それぞれに勤めていた会社を辞め手伝ってくれることになり、2人の息子のお嫁さんたちも、店の経営を見てくれるようになった。

当初は赤字続きだった。そこで利益率の高い洗車に力を入れることにした。洗車機は通常400万円くらいだが、1200万円の高級機を導入した。温水やイオン水を使って洗車後、車を手で拭き上げ、ホイールも手で拭く。さらに通常のワックスに代えて自社開発の「Nポリマー」という独自溶剤を塗布することで、車体をピカピカにし、キズがつきにくくした。これが評判となり、同社の洗車率（来店客のうち洗車を依頼する人の割合）は全国トップクラスとなった。

野口石油のオープンと同時に、野口さんは宣子夫人の勧めで、非行少年少女の協力雇用主になった。北九州市で5番目の協力雇用主だった。

■事務所荒らし犯、秋男の更生

2002年、野口石油の事務所のガラスが割られ、金庫を持ち去られる事件が起こった。その後、女性社員の1人から「指名手配中だけど、いい子がいる。更生したいと

言っているの、一度会ってあげて…」と言われ、当時16歳の秋男（仮名）を面接した。腰まである長い金髪。鼻・口・顎など顔中にピアスをつけた男の子だった。その姿にびっくりしたが、話しているうちに秋男が金庫を持ち去った犯人であることがわかって二度びっくりしたという。野口さんは自首を勧めた。自首するのとならないのでは、その後の更生が大きく違ってくる。秋男は自首に抵抗したが、やがて野口さんの説得に従い、野口さんとともに警察に出頭した。その後、鑑別所から次のような手紙が届いた。

「いろいろとありがとうございました。野口さんが力になってくれたので、安心して自首とかできました。僕はたぶん少年院に行くことになると思うのですが、出てからの仕事のことを、お母さんや家裁の調査官の人と話していて、野口さんのところのガソリンスタンドで働かせてもらうのが一番いいんじゃないかと言われてます。…もっと前から野口さんに会っていたらこういうところに来るようなこと、しなかったらと思うんです。野口さんを裏切りたくないというのものもあるけれど、やっぱり自分自身を変えたいというのが一番大きい。お母さんをもう泣かせたくない…。考えとかも変わったし、本当に一生懸命頑張りたいと思っているので、これからの僕を見よってください」

出所後の秋男は、野口石油で8ヵ月間一

生懸命働いた後、手に職をつけて自立したいと、塗装の仕事に就いた。いまは独立して結婚。子供にも恵まれて幸せに暮らしている。

■車を海に沈めた南将平さんの場合

中原給油所に勤務する南将平さんの母は、南さんが生まれてすぐに離婚。南さんは母の温もりを知らずに大きくなった。恵まれた家庭の真面目な子供たちとは打ち解けることができず、夜の街に出て、不良仲間と朝まで遊び回り、バイクを盗んで暴走、空き巣、傷害などを繰り返した。15歳で警官を殴ってつかまり、警察から紹介されて野口石油で働くようになった。しかし、先輩に叱られ、遅刻して家に何度も電話を入れたことをうるさがつて姿を隠し、再び、軽トラを盗んでパトカーに追われ、その軽トラを海に沈めたり、脱法ドラッグにはまったり…を繰り返した。

野口さんと、次男で中原給油所長の純さんが、その都度、警察、弁護士、保護司、南さんの父らと連絡をとり、本人を説得して再び出社させた。洗車後の拭き上げの仕事が嫌いで、いつもガソリンの給油に回っていた。そのことを注意され、「よし、それなら…」と発奮。やがて店一番の洗車技術を身につけた。車を拭き上げる手を野口さんから「働き者の手だ」とほめられ、洗車を教えた職業実習の養護学校生たちから慕われたことで、自信が持てるようになった。

南さんには、海に沈めたハーレーの270万円の賠償責任があった。給与の中から毎月1万5000円ずつ、15年に渡って返しに行ったが、被害者はそのたびに彼を叩いたという。南さんはあるとき、新札で3万円を前借りしたいと言ってきた。これで最後の2回分を払うのだと言い、新札3万円と菓子折を持って被害者宅に向かった。そして帰ってくるなり「店長！」と、野口さんのもとに駆け寄った（野口社長は、社員から親しみを込めて「店長」と呼ばれている）。被害者は3万円と菓子折を受け取ると、いつものように彼を叩きながら「お前、よく頑張ったな」とほめてくれたというのだ。野口さんは自分のことのように嬉しくて「よかったのお」と言って抱き合って喜んだ。その後、正社員となった南さんは、いま中原給油所を支える重要な戦力になっている。

■非行少年は不幸少年

「非行少年は不幸少年なんです」と野口さんは言う。生まれつきの非行少年なんていない。普通の子供にたっぷり注がれる愛情を彼らは受けることがなかったから、非行に走った。だから、こちらが愛情を持って接し「大丈夫だよ」とハグしてやれば、必ず心を開いてくれる…と野口さんは信じている。

野口石油で働きたいという子供たちを面接すれば、どんなことがあっても採用してきた。面接して断れば、彼らは見捨てられ



野口社長と片野給油所の社員たち



片野給油所外観

たと思うだろう。そうなれば一生立ち直れないかもしれないと思うからだ。

採用後は、子供たちの非行歴は隠さない。隠せば、嘘をつかねばならなくなり、それがトラブルのもとになり、かつては殴り合いの喧嘩になったこともあった。

夜型の生活をなかなか切り替えられず、遅刻してしまう子供が多い。そんなとき、野口さんは家まで迎えに行った。最近は先輩社員たちが迎えに行っている。いつまでも起きられない子供を起こし、時には散らかった室内を片付けてやる。そんな中で、お互いの間に思いやりと感謝が生まれてくる。

事務所に7S(整理・整頓・清掃・清潔・躰・作法・姿勢)のポスターが貼ってある。しかし、子供たちに求めるルールは「嘘をつかない」「お金をごまかさない」の2つだけだという。一日の終わりに、当番で作業日誌を書かせ、売上金を確認させ、銀行のATMまで持って行かせ、入金させる。お金を自分のポケットに入れる子がいないとはいえないが、それよりも、こちらから、お前を信頼しているという姿勢を見せるこ

とが何より大切だと考えるからだ。現金と伝票が合わなければ、全員で徹底的に探す。お金をごまかしたらどうなるかを、みんなと一緒に見ていると、やがて、ごまかせないな…とみんなが思うようになる。

■チームワークより倶楽部ワーク

売上目標はない。売上実績のグラフも掲げていない。ここにあるのは「チームワーク」というより「倶楽部ワーク」だと野口さんは言う。「チームワーク」はプロの集団が組織目標の達成に向けてみんなで力を合わせるが、野口石油の場合、優秀な人材ばかりではない。できる者ができない者をかばいながら売上げを追求する。良い方向づけができれば、雰囲気が良くなり、それに魅かれてお客さんが集まり、業績が向上する。

お客さんたちは、野口石油の従業員の多くが元非行少年少女だったことをよく知っていて、応援してくれる人が多い。ガソリン価格は他店よりもリットル当たり10円近く高いのだが、それでも多くの人来店する。お菓子や果物を差し入れてくれる人も

いる。

通常5～6人で運営される1軒のスタンドに、そんな子供たちが10人以上働いている。その中で採算をとるために、経費はぎりぎりまで絞り込んでおり、社長の野口さんが役員報酬を辞退し、月額給与を19万6800円にとどめているのはそのためである。

1人ひとりには、月15万円以上の給与をすべて新札で支払っている。期末には、1年間の働きをねぎらい、わずかだが期末賞与も出し、その日はみんなで八幡ロイヤルホテルに泊まる。「ホテルははじめて！」と言ってはしゃぐ子供が少なくない。

野口さんが会長を務める福岡県協力雇用主会は、非行少年の再犯防止という趣旨に賛同した企業970社が会員になっている。実際に雇用している企業は75社。この数は



歴代忘年会の写真

東京都に次いで2番目に多い。中には人手不足の折、労働力として期待している企業もあるが、できれば、この子供たちが生まれ育った環境にきちんと思いを馳せ、社会復帰を手伝ってあげてほしい。そんな思いから、野口さんは自身の体験と自社での取り組みを、講演やメディアを通じて発信し続けている。

取材・執筆 山口 幸正 (やまぐち ゆきまさ)

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中